

新旧学習指導要領下での高校英語教科書 語彙の比較

坂 田 直 樹

要 旨

2013年度より、高校新学習指導要領がスタートし、英語教科書の頁数が約11%増加した。それに伴う、「付随的英単語学習」を取り巻く環境の変化について、①旧課程・新課程両教科書コーパスにおける付随的学習が可能な語数の変化、②頻度が増加した語の特徴、③参照基本語リストを用いた教科書語彙の特徴の分析を軸として調査を行った。結果として、新課程教科書では89語の、もしくは158語の単語習得数増加が見込まれることが概算された。一方で、参照基本語リストに存在する基本語と思われる単語の出現がないことや、学習指導要領の目標語数、先行研究に沿ったリーディング等に必要単語数を鑑みると、今回の学習指導要領の改訂に伴う変化は、肯定的には捉えられるものの、十分とは言い難いと思われる。

キーワード：教科書、語彙習得、付随的語彙学習、学習指導要領、コーパス

1. はじめに

日本における大学生の英語語彙力はあまり高くないと言われてきた。例えば、野中(2004)では、多肢選択式英語語彙テストを用いた調査の結果、国立1大学・私立1大学所属の大学1年生172名の平均語彙サイズは3,773語と判明した。また、五十嵐(2003)では、英単語の語義を書かせるタイプのテストを私立1大学1・2年生計477名に対して行った結果、平均語彙サイズは1,542語と判明した(二つの結果に数字上の大きな開きがあるが、語義を書かせるタイプのテストは選択式よりも難しく、数値は小さくなるのが一般的である；cf, Laufer et al., 2004)。様々な英語使用場面において語彙知識は重要であり、例えば、Laufer and Ravenhorst-Kalovski (2010)では、母語話者向けの文書について、その98%をカバーするには8,000ワードファミリー、95%をカバーするには4,500-5,000ワードファミリーの英単語が必要だとされているため(95%、98%のカバー率があることが、スムーズな英文読解の前提条件とされ

る；Hirsh & Nation, 1992)、上述の日本人英語学習者の持つ英語語彙サイズは不十分であることが分かる。

英単語の学習には、教科書等のインプットを通して、センテンスや文章の中で習得する「付随的学習」と、単語帳や単語カードを使用して、単語のみを習得する「意図的学習」がある。本論文では、教科書に出てくる語彙を対象とするため、「付随的語彙学習」が主なターゲットとなる。付随的語彙学習では、英単語に触れる回数が多いほど学習機会が確保されるため、出現回数の多い語彙がバランスよく含まれるほど、学習者は多くの語彙を習得できることになる。また、頁数が多いほど、自然と各単語の出現回数も増えるため、一つには、全体的なインプット量の多寡が、学習者の語彙サイズを決める鍵を握っていると言える。

また、日本国内のような状況に限って考えると、教科書の影響は付随的学習のみに止まらない可能性がある。高校教科書で使用された語彙は、一般的には大学入試の使用語彙になることが多く、大学入試の使用語彙が、巡って高校生が使用する単語集の材料になっていることが多い。高校生は、直近の大学入試に出ない単語は、敢えて学習しようとはしないためである。そのため、もし高校教科書で使用されている語彙が、一般的な(国外での)英語使用の実態に合っていない場合には、高校卒業時点での高校生の英語語彙の実用性に問題が生じることになってしまう。

このような前提条件の中、高校教科書の英語語彙使用について、長谷川・中条・西垣(2008)は、1出版社の中学校教科書(3学年分計3冊)と、5社の高レベルの高校英語教科書の語彙を調査した結果、同教科書群を使用する生徒は2,454語から3,250語(レマ換算)の語彙を学習すると算出した一方で、同教科書群だけでは、TOEIC, TOEFL, TIME等のリーディングに必要な語彙を満たすことはできていないと分析した。Sakata, Tagashira, and Mochizuki(2014)では、旧課程高校英語教科書の語彙を一般英語コーパスCOCAと対照させて分析した結果、上位2,000語までの語彙は両者で重なることが多いものの、教科書頻度が2,001番目から3,000番目の語になると、必ずしも高頻度語ではなく、特定のトピックに偏った単語等が頻出することが判明した。また、同研究では、教科書コーパスにおける頻度と、一般コーパスにおける頻度の学習者への影響を調査し、前者の方が影響が大きいことが分かった。

また、海外においては、Catalan and Francisco(2008)がスペインにおける

中等教育の英語教科書2冊の語彙を調査し、重要語の出現順位が両者間でバラバラであり、一部の語で頻度や出現の間隔が適切でないことを明らかにした。Koosha & Akbari (2010) は、イランの中等教育の英語教科書を分析し、その語彙は、一般英語コーパスBNCのトップ3,000ワードファミリーに属する語の15.4%しかカバーしていないことを明らかにした。

以上より、日本の英語教科書については、3,000語前後の語彙を獲得できる内容にはなっていると考えられる。しかしながら、その3,000語の内容は、国外も含めて、必ずしも学習者の言語使用に直結する有用な語彙とはなっていないようにも見える。

このような状況下、日本国内では、新学習指導要領(文部科学省2016)の導入により、平成25年度以降の高校入学者について、教科書の頁数が増加した。新学習指導要領では、

目標は、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養うこととした。

指導する語数を充実し、例えば、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」をすべて履修した場合、高等学校で1,800語、中高で3,000語を指導することとした。

とあり、各目標の実現のために、指導する語数が、(中高合わせて)2,200語(旧課程)から3,000語(新課程)へと増加している。それに伴い、教科書の頁数も増加傾向にあり、教科書協会(2016)によれば、高校英語教科書の一冊当たりの頁数は、142頁(旧課程)から158頁(新課程)へと11.3%増加した。そこで、本論文では、教科書の頁数が増加したことが、英語語彙習得に与える影響を調査する。具体的には、新旧学習指導要領下での教科書における語彙使用を比較することで、両課程を経た高校卒業生(=大学入学生)にどのような語彙力の差が生じるかを予測し、新学習指導要領下における教材の改善によって想定される効果を検証することとする。

2. 方法

新旧課程教科書を電子化の上、英単語の頻度リストを作成し、両課程間で、①基本語の頻度がどのように変化したか、②頻度が増加した語、減少した語の特徴は何か、③基本語彙リスト(新JACET8000付加リスト：中高コミュニケーション支援語彙リスト)を参照した際に、両者にどのような差異があるかを観察した。

2.1 調査対象の教科書

平成15年度より実施された高校旧課程用の教科書24冊(平成25年度発行)と、平成25年度より実施されている高校新課程用の教科書23冊(平成25年度・28年度発行)を対象とした。また、今回の分析では、学習者のインプットへの直接の影響を見ることを目的としているため、インプット科目と考えられる、

旧課程：英語I・英語II・リーディング

新課程：コミュニケーション英語I・コミュニケーション英語II・コミュニケーション英語III

を使用することとした。比較的頒布数の多い旧課程教科書から、英語I・8冊、英語II・9冊、リーディング・7冊を選択した(出版社名・書名は、種々の影響を考慮してここでは非公表とする)。また、新課程については、新旧課程の比較という目的に沿って、選択した旧課程教科書と同じ出版社が発行する、コミュニケーション英語I・8冊、コミュニケーション英語II・8冊、コミュニケーション英語III・7冊を選択した。

2.2 教科書の電子化・新旧課程教科書の単語リストの作成

まず、上記計47冊の高校英語教科書を購入の上、裁断・スキャンニングを行った(尚、旧課程の24冊、新課程の内コミュニケーション英語Iの8冊については、専門業者に依頼して裁断・スキャンニングを行い、その他の15冊については著者自身で行ったが、いずれの場合においても裁断・スキャンニングは正確に行われており、問題となる差異は生じていないと考えられる)。

スキャンニングによって出来上がったPDFファイルについて、Adobe

Acrobatにて、OCR処理(画像からのテキストの読み取り)を行なった上で、PDFファイルをテキストファイル化後、AntConc (Anthony, 2014)にて、新旧課程双方の単語リストを作成した。なお、単語リストを作成する際に、レマリストを使用し、作成するリストの単位はレマとした。また、紙媒体の教科書をスキャン・OCR処理する過程において、①文字情報でないものを文字として拾う、②本来単語であるものが(文字が入れ替わる等の影響により)単語と認識されない、という2つの要因から、ノイズが生じるが、単語リストを作成する目的と照らし合わせた際に、①は大きな問題とはならず、また、②についても本研究の目的が、各課程の教材の完全な単語リストを作成することではなく、両課程の単語頻度の違いの傾向を探索することにあるため、今回はノイズの処理は特に行わないこととした。

2.3 新旧課程教科書の比較方法

Horst, Cobb, Cobb, and Meara (1998)によれば、リーディングを通した付随的学習で単語を習得するには、最低8回の遭遇が必要とされる。そこで、本研究ではまず、一人の学習者が高校三年間を通してインプットとして触れる各単語の延べ出現回数が8を超える単語を習得可能単語とし、この習得可能単語数が、新旧課程間でどのように変化したかを調査する。また、旧課程では、2,200語が中高を合わせた目標語数とされていたが、旧課程における目標語数の順位に当たる単語の頻度を調査した上で、その頻度が新課程では頻度順に何番目にあるかを算出することで、習得可能な語数の変化の第二の指標とする。

尚、今回の調査では、旧課程24冊、新課程23冊を対象とするが、複数の出版社が発行した教科書の8つのシリーズを使用しているため、高校生一人が触れるインプットは、トータルの出現数を、8で除した数となる。そこで、今回は各課程の調査対象教科書全冊における出現数を、8で除した数を、一人の高校生が三年間を通して触れた各単語のインプットであると仮定する。つまり、各出版社間で、出現に偏りがあることは十分に想定されるが、今回の調査の目的は、新旧課程間の教科書の比較にあるため、個々の教科書間のばらつきについては無視することにする。

次に、新旧教科書間で、出現が増加した語を調査し、新課程教科書の語彙の特徴を明らかにする。教科書に出現する単語としては、①一般頻度が高く用途

も多い基本語、②一般頻度は高いが高校学習にはあまり適切でない語、③一般頻度は低いものの英語を使用するにあたっては重要な語、④同様に頻度は低い
が教室での英語使用に必要な語、⑤同様に頻度は低いが高校生の興味に合っ
ている語、⑥特定の分野にとって重要な語、⑦①-⑥のいずれにも当たらない低
頻度且つ重要度も低い語、に分類することが可能であるが、新旧課程教科書で
増加した語がこのいずれの分類に当たるかを見ることで、新課程教科書出現語
の傾向を見ていくことにする。

さらに、新課程教科書が、既に作成されている基本語リストを参照語彙表と
して、どのような語彙を含んでいて、どのような語彙を含めていないかを調査
することで、教科書での出現が足りないと思われる語の特徴を抽出していく。
今回は、参照語彙表として、「中学高校コミュニケーション支援語彙リスト」(大
学英語教育学会基本語改訂特別委員会2016)を用いる。こちらは、JACET基本
語改訂委員会(2013年4月～2016年3月までの時限委員会)にて著者も作成
に関わったもので、英英辞典定義語彙(5つの辞書のうち、3つ以上に出現する
もの)・New GSL (Browne, 2013)・中学校教科書出現語を元に、中学校・高校
において学習することが必要な語彙リストであることを目指して作成されたも
のである。(中学校の)教科書も参照はしているが、英英辞典の定義語彙を支柱
としたもので、英語の基本語彙をカバーすることを念頭に置いているリストと
言える。本論文では、当リストに登場していながら、教科書での出現が少ない
語を明らかにすることで、新課程教科書語彙の特徴をさらに探っていく。

3. 結果

表1 旧課程教科書コーパス単語リストにおける順位・頻度(抜粋) - 1

単語	順位	頻度
term	832	65
adapt	833	64
attack	834	64
disappear	835	64
either	836	64
floor	837	64
guilty	838	64
mystery	839	64
purpose	840	64
round	841	64
video	842	64
basic	843	63

表2 新課程教科書コーパス単語リストにおける順位・頻度(抜粋) - 1

単語	順位	頻度
wind	921	65
beginning	922	64
charge	923	64
classroom	924	64
dark	925	64
lucky	926	64
miracle	927	64
quality	928	64
relationship	929	64
rock	930	64
style	931	64
anyone	932	63

3.1 付随的語彙学習の条件を満たす語数の変化

表1、2は、それぞれの課程の教科書コーパスにおける単語リストを、頻度の大きい順に並べたものの一部である。前述のように、各高校生が触れたインプットがコーパス頻度を8で除した数であるとする、各人がインプットとして8回ある単語に触れるためには、コーパス上では64回の出現が必要であると

考えられる。

表1 (旧課程) のリストを眺めてみると、旧課程では頻度順が842番目の単語までが、出現頻度が64回以上となっているのに対し、表2 (新課程) を眺めてみると、931番目の単語までが64回以上の出現頻度となっている。非常に単純化した議論ではあるが、新課程での教科書での分量が増えたことが、付随的語彙学習できる単語の数を、89語 (10.6%) 増やしたと言えるかもしれない。

表3 旧課程教科書コーパス単語リストにおける順位・頻度 (抜粋) - 2

単語	順位	頻度
typical	2200	15
user	2201	15
appropriate	2202	14

表4 新課程教科書コーパス単語リストにおける順位・頻度 (抜粋) - 2

単語	順位	頻度
urgent	2358	15
wildly	2359	15
absolutely	2360	14

一方で、表3、4を見ると、旧課程で目標とされていた2,200語付近の単語が、24冊計で15回登場するのに対し、新課程では旧課程より158語多い2,360語付近の単語が、15回の登場となっている。この変化の度合を鑑みると、あくまで単純化した話ではあるが、教科書だけを見た場合、新課程の教科書は、2,200語から3,000語への800語の習得単語目標数の増加を担いきれていない可能性が高い。

表5 新課程教科書コーパス単語リストにおける順位・頻度

単語	新課程順位	新課程頻度	旧課程順位	旧課程頻度	頻度差(新課程-旧課程)
ion	147	445	1665	24	421
blank	171	405	2422	11	394
suitable	359	186	2399	12	174
paragraph	344	195	1571	27	168
correct	376	177	1493	29	148
unit	493	131	2140	16	115
summary	534	122	2326	13	109
text	512	127	1645	25	102
pig	558	117	2120	16	101
statement	623	102	3082	6	96
partner	597	108	1823	21	87
president	580	111	1573	27	84
tooth	604	107	1511	29	78
tower	664	95	2082	17	78
ant	726	86	2520	10	76
conversation	626	101	1492	29	72
lecture	775	80	2800	8	72
pigeon	876	69	4017	1	68
digital	827	74	2890	7	67
replace	682	92	1603	26	66
boat	665	94	1487	29	65
bottle	752	83	1695	23	60
decline	913	65	3134	5	60
review	729	86	1533	28	58
belong	751	83	1514	28	55
roof	777	80	1606	26	54
discuss	757	82	1495	29	53
solar	760	82	1507	29	53
fix	871	69	2047	17	52
gain	872	69	1977	18	51
positive	908	66	2122	16	50
emotion	915	65	2159	15	50
miracle	927	64	2115	16	48
cafe	881	68	1748	22	46
bee	836	72	1551	27	45
magic	886	68	1595	26	42
coach	893	67	1585	26	41

quality	928	64	1726	23	41
charge	923	64	1619	25	39
fashion	895	67	1499	29	38

3.2 新課程で頻度が増えた語の特徴

表5は、旧課程コーパスでの頻度が30を下回るも、新課程コーパスでの頻度が64以上となっている40語を、その頻度の増加が大きい順に並べたものである。「2.3」の中で述べた分類に沿って大まかに分析をしてみると、

①一般頻度が高く用途も多い基本語

blank, suitable, correct, unit, summary, text, statement, partner, president, conversation, lecture, digital, replace, boat, bottle, decline, review, belong, roof, discuss, fix, gain, positive, emotion, miracle, cafe, quality, charge, fashion

②一般頻度は高いが高校学習にはあまり適切でない語
なし

③一般頻度は低いものの英語を使用するにあたっては重要な語
tooth, magic

④同様に頻度は低いが教室での英語使用に必要な語
paragraph

⑤同様に頻度は低いが高校生の興味に合っている語
pig, ant, pigeon, bee, coach

⑥特定の分野にとって重要な語
ion, tower, solar

⑦①-⑥のいずれにも当たらない低頻度、且つ、重要度も低い語
なし

となった。新課程コーパスにおいて、頻度が増えた語を全部眺めたわけではないが、この40語の傾向を見る限り、②⑦に当たる語がないことから、比較的

有用な語の頻度が増加していることが伺える。付随的語彙学習の条件を満たす単語が増えたことと同様、新課程の教科書が、旧課程と比べて、より有用な語の学習に向いていると言うことが出来そうである。

3.3 基本語リストとの対照

表6 中学高校コミュニケーション支援語彙リスト上にあるが、新課程教科書コーパスに出現がない336語

acknowledge, adequate, affair, African-american, afterward, agenda, aircraft, airline, alongside, alternative, amaze, amazing, America, American, an, analyst, analyze, anime, anymore, apologize, appoint, April, assess, asset, assign, assumption, assure, August, Australia, Australian, automatically, backward, baseball, basketball, behavior, bind, biological, blade, blossom, blueberry, bookstore, boring, bound, breast, Britain, British, cafeteria, Canada, Canadian, capacity, carpenter, carrot, CD, cent, center, chairman, cheat, cherry, China, Chinatown, Chinese, Christmas, cigarette, classmate, cloudy, CO₂, color, colorful, comic, commitment, component, considerable, consistent, continuous, convert, cookie, cooking, core, corporate, corporation, crane, crew, criterion, criticize, crucial, curry, cute, December, defense, deposit, depression, dispute, distribute, dominate, earthquake, eight, eighteen, eighth, eighty, elementary, eleven, eleventh, email, embarrass, engineering, English, enhance, entry, eraser, establishment, estate, evaluate, evaluation, eve, excited, exciting, false, fancy, favor, favorite, February, fifteen, fifteenth, fifth, fifty, filter, firework, fishing, five, flavor, flesh, flute, format, forty, four, fourteen, fourteenth, fourth, Friday, fry, garbage, gasoline, gay, generous, gram, grandparent, gray, gym, hamburger, hammer, headache, hi, honor, household, housework, humor, hundred, immigrant, implication, incentive, including, infect, initial, initially, inquiry, interaction, interested, interesting, internet, interpreter, investigation, investment, investor, isolate, January, Japan, Japanese, judgment, July, June, kilogram, kilometer, koala, Korea, Korean, labor, landmine, lantern, legislation, liberal, limitation, lump, maintenance, manufacturer, mate, mechanism,

media, meter, million, mode, moderate, Monday, neighbor, neighborhood, New Zealand, nine, nineteen, ninety, ninth, noodle, noon, November, o'clock, October, online, percentage, permanent, phenomenon, pizza, politics, premise, presidential, primarily, prior, procedure, promotion, prompt, proof, prospect, provision, qualification, quiz, racket, rainy, reasonably, reduction, requirement, resolution, restriction, retain, reuse, revenue, robot, routine, santa, Saturday, scare, scheme, screw, secondary, sector, secure, September, settlement, seven, seventeen, seventh, seventy, sew, sexual, shopping, shrine, sightseeing, significantly, six, sixteen, sixth, sixty, sleepy, snack, snowy, softball, spaghetti, specialize, sponsor, stare, statistic, steak, submit, substantial, Sunday, surprised, surprising, tackle, teammate, temporary, ten, tendency, tenth, theater, third, thirsty, thirteen, thirteenth, thirtieth, thirty, thousand, three, Thursday, tire, tired, toast, training, transition, transportation, true, t-shirt, Tuesday, twelfth, twelve, twentieth, twenty, two, unclear, undergo, unemployment, update, used, vacation, variable, venture, vital, volleyball, voter, warming, web, website, wed, Wednesday, welfare, widespread, wow, wrestler, wrestling, zero, zoo

表6の336語を概観してみると、seventh, sixthのような序詞、Tuesday, Septemberのような曜日、月名、Japan, New Zealandのような国名など、中学校までで学習が終了していると思われる項目がある。また、spaghetti, pizza, steakのような単語は、学習者の興味を引くための単語とも言え、必ずしも高校教科書に含まれていなければならない内容とは言えないように思われる。一方で、apologize, defense, deposit, moderate, retain, welfareのような単語は、英語でコミュニケーションをする際に他の語で代替するのが難しい基本語と言えるため、本来は高校教科書に含まれているべきだと考えられる。

4. 考察

結果を総括すると、出現頻度8回(8シリーズの教科書コーパス合計64回)を付随的語彙学習の閾値と設定すると、旧課程よりも新課程の方が、89語、学習できる単語の数が増加した。また、旧課程における単語学習の目標値は2,200語であったが、その語数に当たる旧課程コーパスにおける出現頻度(15回)を

基準とすると、新課程教科書では、旧課程より158語多い2,359語の単語を習得できると算出された。旧課程から新課程で頻度が増加した語彙を個別に眺めてみると、そのほとんどが「一般頻度が高く用途も多い基本語」であり、新課程の教科書語彙は、旧課程に比べて有用な語彙の習得が容易になっていると言って良いと思われる。一方で、「中高コミュニケーション支援語彙リスト」を参照リストとして見てみると、新課程の教科書には、apologize, moderate等の重要語が含まれていないことが分かる。増加したとは言え、依然少ない教科書の頁数の制約の中で、重要語が漏れていることが伺える。

上記の結果から、2013年より実施の高校学習指導要領の導入により、教科書で付随的語彙学習ができる環境は以前よりは良くなったと言える。頁数が増加したことにより、今回採用した2つの指標のいずれを使用しても、付随的語彙学習の可能な語彙が増えているように見える。また、頻度が増加した語彙についても、基本的には有用な語が多いようである。

しかしながら、本研究ではさらに、①新学習指導要領の要請する3,000語という目標に対して、今回の頁数の増加による習得可能語彙数の増加は十分でない、また、②基本語リストと対照すると、依然一般英語使用に重要な単語が教科書に含まれていないことが少なからずある、ことも分かった。状況は改善されつつあるが、冒頭に述べたように最低でも4,500ワードファミリーが各英語使用に必要な状況を鑑みると、今回の教科書の内容の変化は、道半ばであり、改善の余地が残っていることは否めない。

尚、今回の研究では、各課程における単語の総異なり語数の変化までは調査していない。今回の結果を鑑みるに、総異なり語数も恐らく増加していることが考えられるが、総異なり語数が増えたことで、高校生の語彙学習が直接改善するかについては疑問が残る。教科書に登場したとしても、頻度が低い単語については付随的語彙学習が起こりにくく、また、教科書語彙が持つ様々な影響(入試への採用、単語帳への採用)も生じにくいと考えられるからである。

冒頭に述べたように、教科書語彙は単語帳への採用等、影響が大きい。各単語が教科書で採用されているか否かが、実際の英語使用のコーパスよりも学習者に影響を与えている(Sakata, Tagashira, Mochizuki, 2014)。今回の分析の結果、新課程教科書が旧課程に比して、語彙習得に好影響を与える可能性が高い点は評価できるが、学習指導要領の目標、各研究からの必要な単語数、教科

書の与える影響の大きさを考慮すると、より一層の改善が望まれる。

学習指導要領の変化で、教科書のページ数は11.2%増加した。その影響で、2,200語から習得可能語数が2,359語へと7.2%増加したと考えると、単純計算ではあるが、4,000語を目標とした場合には、 $(4,000 - 2,200) \div (2,359 - 2,200) \times 11.2\% = 127\%$ のページ数の増加(旧課程教科書比)が必要となる。これを計算すると、一冊平均322ページとなる。この多さは現実的でないと思われるかもしれないが、諸外国の例を鑑みると一概にそうとも言えない。大井・石川・田畑(2005)では、韓国と日本の英語教科書の比較を行なっているが、例として取り上げた教科書の『MIDDLE SCHOOL ENGLISH 3』のページ数は327ページであったとしている。上記322ページと近い点は偶然だが、教科書が有する各種影響を考えると、日本の英語教科書についても、頁数を抑えて語彙の学習は「個人の購入する単語帳に依存」という現在の慣行を改善していく余地はあると思われる。今後は、頁数をさらに増加させて、例えば3.3で挙げた語群を習得できる体制を構築するなど、日本の高校生が、英語語彙を「学習の基盤となる教科書を通して」学べる体制を充実させていくことが、求められる。

5. 結論

本論文では、学習指導要領の2013年度からの実施に伴う教科書語彙の変化を、想定される習得単語数、頻度が増加した単語の種類、基本語彙表との対比を軸として分析した。教科書語彙の変化は、全般として習得単語数の増加に寄与するものと言えそうだが、文部科学省の掲げる目標、及び、先行研究から導き出される必要な単語数と比較すると、その変化は不十分なものと言える。今後、学習者が大学入学時点で一定程度の英語語彙量を確保できるようにするためには、基本的には教科書の頁数の増加が求められると思われる。

最後に、本研究には以下の限界がある。まず、教科書の電子化・コーパス作成に当たり、基本的に詳細なノイズ除去を行っていない点を挙げなくてはならない。必要な頁数の算定などを精緻に行うためには、ノイズ除去をしっかりと行なった上で、各単語の頻度が正確であることが肝要である。本研究におけるデータは、旧課程教科書と新課程教科書を比較するための、あくまで「暫定的」な利用に留める必要がある。

次に、本研究では教科書のみを比較しただけで、実際の高校学習修了時の学

習者の語彙サイズの比較は行なっていない。課程別の成果を正確に比較するためには、実際に学習を終えた生徒の状況をチェックすることも重要であると考えられる。

参考文献

- (1) 五十嵐紀子(2003)「大学生の英語語彙力と英文読解に対する不安」『新潟医療福祉学会誌』第3巻第1号, 17-23.
- (2) 大井恭子・石川直美・田畑光義(2005)「日本と韓国の中学校英語教科書の比較: 論理的思考を育てるという観点から」『(II. 人文・社会科学系). 千葉大学教育学部研究紀要』第53号, 249-258.
- (3) 教科書協会 <http://www.textbook.or.jp/publications/data/13tb_issue02.pdf 2016年11月5日>
- (4) 大学英語教育学会基本語改訂特別委員会(2016)『大学英語教育学会基本語リスト新 JACET8000』桐原書店
- (5) 野中辰也(2004)「日本人大学生の英語語彙サイズ」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第34号, 25-34.
- (6) 長谷川修治・中條清美・西垣知佳子(2008)「中・高英語検定教科書語彙の実用性の検証」『日本大学生産工学部研究報告 B (文系)』第41号, 49-56.
- (7) 文部科学省 <http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf 2016年11月5日>
- (8) Anthony, L. (2014). AntConc (Version 3.4.4) [Windows]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available from <http://www.laurenceanthony.net/>
- (9) Browne, C. (2013). The new general service list: Celebrating 60 years of vocabulary learning. *The Language Teacher*, 37, 13-16.
- (10) Catalán, R. M. J., & Francisco, R. M. (2008). Vocabulary input in EFL textbooks. *Revista española de lingüística aplicada*, 21, 147-166.
- (11) Hirsh, D., & Nation, P. (1992). What vocabulary size is needed to read unsimplified texts for pleasure?. *Reading in a foreign language*, 8, 689-689.
- (12) Horst, M., Cobb, T., Cobb, T., & Meara, P. (1998). Beyond a clockwork orange: Acquiring second language vocabulary through reading. *Reading in a foreign language*, 11, 207-223.

- (13) Koosha, M., & Akbari, G. (2010). An evaluation of the vocabulary used in Iranian EFL secondary and high school textbooks based on the BNC first three1000 high frequency word lists. *Research in Curriculum Planning: A Quarterly Journal of Science and Research, 1*, 157-186.
- (14) Laufer, B., Elder, C., Hill, K., & Congdon, P. (2004). Size and strength: do we need both to measure vocabulary knowledge?. *Language testing, 21*, 202-226.
- (15) Laufer, B., & Ravenhorst-Kalovski, G. C. (2010). Lexical threshold revisited: Lexical text coverage, learners' vocabulary size and reading comprehension. *Reading in a foreign language, 22*, 15-30.
- (16) Sakata, N., Tagashira, K., & Mochizuki, M. (2014, December). Vocabulary in high school textbooks and its influence on students. Paper presented at the JACET Vocabulary SIG Annual Conference, Tokyo.